植草学園短期大学研究紀要　第11号　65～71頁（2010）

共同研究その１

災害に対応できる介護福祉士のための授業について

Lesson Summary for Care Workers to Deal with Disasters

今井　訓子[1]　　斎藤　代彦[2]　　古川　繁子[3]

「災害に対応できる介護福祉士の養成」は①地域との交流・ネットワークづくり、②授業に取り込む、③講演会や施設の災害対策アンケート調査などから構成される。本報告は、その中で、「災害に対応できる介護福祉士の養成」を授業にどのように組み込むことができるか、今年度の授業での試みを報告する。年度初めから準備できなかったこともあり、２年課程の１年生では６科目、専攻科では２科目で報告されるにとどまった。系統づけて各教科目と連携を持ちながら、重複や不足への配慮が必要であり、とりわけ、学生が理解しやすい構成が求められる。

一つひとつ授業を観ていくと学生は、災害時の対応に興味を持ったことがアンケートからわかり、学生の反応も良かった。しかし、学生の頭の中で災害に関する介護のイメージが構築されたかは、今回検討されていなかったことが今後の課題として取り上げられた。

今回の研究からは、災害緊急時及び平常時の生活への移行期やその準備に係る介護福祉士の専門性の教育が、平常時のみを想定した介護福祉士養成よりもさらに質的に高い専門性をもたらすことが展望された。

キーワード：災害時対応、介護福祉士養成、専門性、授業展開、カリキュラム構成

１．はじめに

本年度はじめに、計画された「災害に対応できる介護福祉士の養成」研究の一環として、各科目の一部で災害に関する授業を行うこととなった。今回は災害に関する授業を行った結果を報告し、「災害に対応できる介護福祉士の養成」をカリキュラムの中にどのように取り入れることができるか等の検討を行った。

２．各授業の概要と授業評価

各授業での取り組みの概要と評価を報告する。

今年度、各授業科目を開講する中で「災害に対応できる介護福祉士養成」に関する授業を各一コマづつ行うこととなった。取り上げた科目は７科目報告されている。２年課程では１年生で４科目、専攻科（１年課程）では、３科目の報告があった。２年課程の２年生で取り組まれた報告は０教科であった。研究開始が年度の途中からであったことと、年度が終わる前に報告をまとめるということで、今回の授業報告数は少ない。また、以上のことから非常勤教員の科目では行わなかった。

今回、災害に関する授業を実施した教科目と、実践したがアンケートをとらなかったため報告をしていない教科目がある。また、最終授業で「災害に対応できる介護福祉士の養成」に関する授業を開催予定の教科目もある。実施した教科目を表１にまとめた。

1，2，3 植草学園短期大学

表１　災害に関する授業を実施した教科目と授業内容

対 象	時 期	授業科目名（○印　本誌報告）	授業内容　（＊印　アンケート実施）	教 員
２年課程 １年	前期	○人間関係の形成とコミュニケーション	＊災害用伝言ダイヤル	山田
		○生活支援技術	＊災害のイメージ、支援法のイメージ	今井
		生活と福祉	災害と地域活動のイメージ	根本
	後期	○人間の尊厳と自立	＊災害のイメージ、役立つ道具作り	山田
		○介護支援技術Ⅳ	＊避難支援プログラム	岩本
		地域共生論	ボランティア活動	清宮
		○老化と発達の理解Ⅱ	＊被災者の生活不活発病	今井
		介護支援技術Ⅴ	災害時の睡眠の状態とその影響	今井
		○介護の基本Ⅲ	災害時に起きやすいリスクとそのマネージメント	今井
専攻科	前期	○生活援助技術Ⅳ	＊避難生活での排泄	井口
		コミュニケーション技術	被災者に対する傾聴	古川
	後期	○認知症の理解	＊防災ネットワーク作り	布施
		介護の基本Ⅲ	災害時に起きやすいリスクとそのマネージメント	今井

今回は、準備する時間的な余裕がなかった、または、事前に予定されている授業計画に割り込む余地がなかったなどの理由で実施できなかった教科目は２年課程では、「障害の理解」「介護過程Ⅰ」であり、専攻科では、「障害の理解」、「介護支援技術Ⅰ」、「介護支援技術Ⅱ」、「介護支援技術Ⅲ」、「介護支援技術Ⅴ」、「介護総合演習Ⅰ」である。

以下は「災害に対応できる介護福祉士養成」に関する授業を行い報告された教科目の報告である。

【２年課程・１年生】

Ⅰ授業名：「人間の尊厳と自立」（担当：山田、11月４日、20日、21日、22日、後期、３コマ）

授業目的：災害をイメージし、災害時に役立つ物（浄水器、コンロ、灯り）の作り方を学ぶ

授業方法：

授業２コマ；講義、演習（工作し、工作物を使ってみる*）。資料配布。

＊障害者団体の勉強会で船橋市からの出前講座により学んだ内容

学　園　祭；作品を展示し、来場者と共に工作する。ポスター発表する。

教員２名で指導

授業概要：導入；災害時にライフラインの復旧に時間がかかること

マズローの５段階欲求説から災害時の欲求とこれから工作物を作ることで得られることについて説明。

本論；

１．工作の説明、見本を見せる。工作する。

・浄水器：ペットボトル２ケとティッシュペーパー

・コンロ：アルミ缶、アルミホイル、ティッシュペーパー、食用油

・灯　り：ガラス瓶、アルミホイル、ティッシュペーパー、食用油

２．工作物を実際に使う（屋外）

浄水器で濾した水をやかんに入れ、ティッシュペーパーで作った芯に火をつけ、沸かし、お茶を飲んだ。ガラス瓶の灯りに灯をともした。

３．学園祭で発表

工作物の展示、工作を来場者と作る

ポスター発表（ライフライン復旧までの時間、備蓄品、工作物の作り方、災害に関する講演会、ことぶき大学校生との災害エスノグ

ラフィーによる多世代交流、学生の工作作成時の写真）
ビデオ上映（「災害用伝言ダイヤル１７１」、その他災害に関するもの）
※教員による災害についての施設アンケート結果も同時に掲示した。

4．まとめ；アンケート記入（学園祭後の授業で）

アンケート結果と考察：36人回答

1．「災害のイメージができたか」
できた53%、少しできた44%、あまりできなかった３%であり、大部分は災害のイメージがある程度できている。

2．「地域のネットワークやボランティアの大切さについて理解したか」
できた64%、少しできた36%であり、高い確率でできている。

3．「学んだことを３つあげる」
浄水器、コンロ、灯り作りについて　53件、人数30人（83%）
災害用伝言ダイヤル　14件
災害に関する知識、ライフライン、二次障害　13件
コミュニケーション・ネットワークの大切さ　７件
災害への準備（避難場所、備蓄、情報）　６件
その他　各１件　づつ　８件

当然ながら、授業で実践した工作をあげた学生が大多数であった。また、別の授業で教えて、今回は学園祭でビデオを流すだけであった「災害用伝言ダイヤル」を改めて学んだことに挙げていたのは嬉しい。反復することで、身に着くことなのだろう。その他の内容からも災害への認識が高まっていると考えられる。

4．「介護福祉士または住民としてできそうなことは何か」
近所との付き合い、コミュニケーション、連携、要介護者の把握　９件
できることは何でもする。ボランティア活動、協力　９件
浄水器、コンロ、灯りを作る。作り方を教える。　８件
高齢者・障害者の誘導・介護　５件
メンタルヘルス、みんなの不満を聞く　２件
その他（危険な場所の確認、周囲への呼びかけ、情報収集・伝達）　４件
無記入　４人

自由記述に対して、９割の学生が自分の言葉でできそうなことを書いている。傍観者であったり、自分のことだけを考えるのではなく、できることをしたいという気持ちが伝わってくる内容であった。

5．「感想」

浄水器、コンロ、灯り作りについての感想が20件近くで、楽しかった、近所の人に教えたい、災害時に作りたい、こんな身近なものでできるのかという驚き等であった。

学園祭については８件で、教える大変さ、会場が目立ちにくい教室であった、PRの方法の工夫などであった。

その他、災害時に学んだことを活かしたい、備え等について、６件であった。

身近なもので災害時に役立つ工作をし、実際に使ってみて、学園祭で来場者に教えるという、かなりの時間を使った内容であったので、学生にとって印象深いものになったよだ。授業、学園祭での実践方法を改善することも多いが、学生に災害についての意識付けにはなったといえる。

Ⅱ授業名：「人間関係の形成とコミュニケーション」（担当：山田、７月27日、前期、半コマ）
授業目的：災害をイメージし、災害時の情報について準備する
授業方法：講義。啓蒙DVD「災害用伝言ダイヤル１７１*」を見て学ぶ。資料配付
（＊企画構成制作：kirakira　協力：日本災害情報学会、東京都足立区、NTT）
授業概要：導入；災害のイメージ作り
電話回線がパニック状態になりつながらないときの家族・親類・友人の所在・安否確認の重要性を知る
本論：DVD「災害用伝言ダイヤル１７１」を

見ながら、録音・再生の方法を知る

まとめ：特定の日に体験できること、携帯電話からも利用できることを伝え、体験することを勧める

授業を行っての教員の気づいたこと：

アンケート回答者33人

災害用の特別な電話があることは知っていても、具体的な利用方法を知っていた学生はいなかったので、「学んだこと３つ」は皆「１７１」の利用の仕方を記入していた。「感想」はわかってよかった、利用したい、安否確認は家族として重要なことだと実感でき、家族に伝えたいと感動さえ伝わる内容が書かれていた。災害に対する備えを一つ増やすことができたようだ。DVDが明るく、歌とダンス付きで楽しく、わかりやすいのもよかった。

学園祭で同じビデオを上映したので、このダイヤルについては再認識をしたようだ。

アンケートの「災害のイメージづくり」質問には、理解できた・少しできたが73%、「地域とのネットワーク」の質問には、理解できた・少しできたが55%であった。今回の内容が直接これらの項目と関係なかったので、無回答や理解できなかったという回答もあった。「介護福祉士として、住民としてできること」の質問には、「171」を教える６人、身体的介護・一緒に避難５人、できることを協力する４人、話し相手や心のケア３人で、「171」を始め具体的な内容を書いていた。災害のイメージや地域ネットワークの必要性を理解している人が多いと思った。

７月に授業を行い、10月の授業で体験したかを問うたところ、体験者はひとりもいなかった。今後、体験できる日・期間に授業があえば、授業内で携帯電話から体験させたい。

Ⅲ「介護支援技術Ⅳ」（担当者：岩本、11月27日、後期、1コマ）

授業方法：災害関するDVDを鑑賞し避難支援プログラムについて、グループ毎に話し合い、グループ毎に避難支援プログラムを作成する

授業概要：授業テーマ「災害時要援護者への円滑な救助活動及び優先順位について」

導入；本日のテーマによる授業内容の説明を行う

展開；以下の内容について着眼点を持ちDVDを鑑賞することを説明

１．防災部局と福祉関係者との連携
２．避難準備情報等の発令の判断基準
３．要援護者の範囲の決定
４．災害時要援護者情報の共有
５．避難支援プランの作成
６．地域防災力の設置
７．福祉避難所の設置

本論；鑑賞後、上映内容を踏まえグループ毎に話し合いを実施し学生に災害支援計画書を作成させる。

学生間で進行・書記・発表を決め、災害支援計画書に何を盛り込んだほうがよいか話し合う（教員の意図：災害時事前に必要な情報とは何かを理解する）

グループ毎に発表を行う。

教員より講評を行い終結する。

※教材資料：片田敏孝監修、平成19年作成「ドラマで見る災害時要援護者対策の進め方」内閣府

授業を行っての教員の気づいたこと：

事前に６、７人でグループを構成し授業を行い、避難支援プログラムを作成させた。この人数で行ったところ積極的に話し合いが行われ、災害時避難方法についてより深化した発言があった様に窺えた。

日頃授業では、介護を「受ける立場」に立つことについて一義的に伝えてきたが、発表では、介護を「する立場」としての視点で捉えていることがアンケートから窺えた。

今後介護については、利用者目線に立つことを主眼に置き創意工夫を行う授業展開を築きたい。

Ⅳ授業名：「生活支援技術」

（担当者：今井、７月28日実施）

授業目標：災害時における日常生活の変化とその支

援法がイメージできる（１コマ）
授業方法：講義
授業概要：被災地における生活７領域について心身状況の明確化
生活の背景や利用者の社会性の確認　QOLの実現
１．被災地における着衣交換の意義
２．被災地における入浴、清潔保持の落とし穴（中越沖、阪神、十勝沖地震の例を挙げ）
３．被災地生活における食
４．睡眠
授業を行っての教員の気づいたこと：
学生たちには、阪神淡路大震災は、イメージがつかず中越沖地震でさえわからないという者がいた。災害については常に触れておかなければ対応できないと感じた。
また、授業は熱心にきいていたので「何ができるか」を考える機会になったと思う。

Ⅴ授業名：「老化と発達の理解」（担当者：今井）
授業目標：生活不活発病について――災害時に起こりやすい理由と対策を理解する
授業方法：講義とグループミーティング
授業概要：中越沖地震での生活不活発病の発生、ハイリスクな方の特徴と対応
※生活機能低下防止マニュアル使用
授業を行っての教員の気づいたこと：
廃用症候群としてイメージしやすいようであった。
避難所での問題が身近に考えられるようになってきたと思われる。

Ⅵ授業名：「介護の基本Ⅲ」
（担当者：今井、１月19日実施）
授業目標：災害時のリスクをイメージできる。
災害時のリスクマネージメントと平常時のリスクマネージメントの相違が分かる。
授業方法：講義・グループワーク
授業概要：１．災害時の経日的環境の変化について
２．平常時との違いについて
３．マネージメントの視点について
４．事例を挙げてのグループワーク
授業を行っての教員の気づいたこと：
リスクマネージメントの考え方が新鮮な様であった。マネージメントすることで利用者、介護者共に災害時の安全を確保できると思うという感想があり、利用者のみを対象にするのではないことが伝わったと感じる。
またグループワークで他グループの意見を聞き、平常時のマネージメントが災害時にも役立つことに気づいたようである。

【専攻科】
Ⅰ授業名：「生活支援技術Ⅳ」（担当者：井口）
授業目標：災害時（自然災害）によって避難生活をした場合の気持ちよい排泄が維持できるようにするための援助、用具の工夫について考えることができる
授業方法：課題とし、各自レポートし、発表をし、まとめる
授業概要：15回の最後のコマで実施した。
学生は、解剖生理や援助についてなど、ほぼ学習している状況のため課題とした。学生のレポートと中越沖地震のレポートから補足した。
授業を行っての教員の気づいたこと：
学生は具体的に排泄についての課題を各自が調べた。実際の体験の記事なども調べた学生もあり真剣にレポートしていた。アンケートでは、排泄に関するプライバシーや水の問題、排泄障害について学んだようである。また、他の講演で学んだ地域の連携や、ボランティアの必要性について述べていた者もおり、知識と技術が必要であるなど、他で学んだことも結びついて考えていた。

Ⅱ授業名：「認知症の理解Ⅱ」（担当者：布施）
授業目標：防災ネットワーク作りの関心を得る
授業方法：VTRを観たのち課題レポートを書く
授業概要：・VTR「震災を忘れない」を観たのち「もし一人暮らしの認知症の人が災害にあったら」という課題を考えさせレポートさせた。
・VTRは防災ネットワークづくりがプライバシーの問題などで苦労していること、災害用マップ作成がとても有効であること等の内容であった。

授業を行っての教員の気づいたこと：

視覚に訴えたことで、現実として何が問題になるかよく把握できていた。但し、認知症の人という点においては６名中３名のみが意識していた。今後はいろいろな課題を乗り越えてネットワーク推進で、また、事例や認知症の方の実際などを意識的に提示し、学生が主体的に行動できるレベルに知識等を整理していく必要がある。

３.［災害に対応できる介護福祉士の養成］における授業の課題

介護福祉士は利用者の日常生活を支えることにおいて、平常時のみならず災害時にも専門職として支援できる能力を養うことが必要だと考えられる。本校のカリキュラム構成は、介護福祉士教育カリキュラムの中心となる「介護」領域の中の「介護の基本」180時間を12単位６教科に、「生活支援技術」300時間を20単位９教科に分けて授業計画を立てている。各授業の進行度は異なるが、災害に関する授業を取り入れるならば、それぞれの授業のなかでの整合性を図る必要があり、災害に関する分野での統一された見解が必要である。

たとえば生活支援の７領域において災害時の支援方法を説明する場合、それぞれが強く関連した領域であるため、学生が理解しやすい構成が求められる。

生活支援技術は具体的な支援方法を教授することを求められており、平常時のかかわりを基本として構成されている。そこで、災害時にはどんな特徴があるのか、何が平常時と異なるのかを示したうえで、具体的対応が示されると理解しやすい。そのためには基本となる考え方をどの授業単位でいつ教授するのかが明らかにされているとわかりやすい。また、重要な部分が重複して教授されるのは当然としても、どの教科でも同じ内容に時間をかけて説明されては興味が薄れる恐れがある。

これは介護を支える他の領域でも同じことがいえる。「こころとからだ」で災害時の身体的精神的変化や状態を話したうえで、支援方法を説明すると理解が得やすい。しかし、各教科ですべてそのときの利用者の心身の状態に触れていては、時間がなくなり、内容が薄くなってしまう。そのため、各授業のなかでどの進行状態のときに災害に関するコマを入れるかによって、既存の知識量が変わり、内容構成が変わってくる。今回は各教科の担当教員にその点をまかせてしまったので、一つ一つの授業をみると学生は災害時の対応に興味を持ったことがアンケートからもわかり、学生の反応は良かったといえるが、学生の頭の中で災害に関する介護のイメージがきちんと構築されたかどうかの検討がされていない。

授業方法は各教員にまかせ、個性にあわせて行った今回の方法は多様性がある点で効果があったと考えられる。しかし、15回の授業回数の中のひとコマを当てるというやりかたについて、まず、災害についての授業にどのくらいの回数が望ましいのか、また、どの教科のなかにいつ取り入れるとよいのかを検討していくことが課題となろう。

さらに、災害時には地域住民との協働が不可欠であり、ボランティア活動を勧め、その体験を授業に取り入れることも有効であろう。また、「介護」の領域ではない分野での知識を取り入れることも必要になると考えられる。それを介護の時間のなかでうまくつなぎ合わせるには、総合的な災害に関する授業時間として授業単位を起こすことが必要かもしれないが、まず、全体の中でどう位置づけるかをきめて、構成を考えればよい。

以上をまとめると、災害時の介護について、①合計何時間の授業が必要なのかを検討する。②ガイダンスを行う授業をどの時間に持ってくるかを決める。③系統立てた構成にするために各授業での講義構成を検討する。の３点について話し合うことが必要であろう。

４.「災害に対応できる介護福祉士の養成」 今後の授業展望

介護福祉士の養成課程においては「介護の基本」という180時間からなる科目において危機管理や関係職種間の連携、事故防止、安全対策や感染対策も盛り込まれている。このように災害時に関して比較的かかわりのある教科もあるものの、そうではない教科もある。また、各教科の中で災害時に関する観点に触れることはできても、それを１回の授業とし

て展開する時間的余裕も展開できる内容も一様ではない。そういった意味から各教科で一律に１回分の授業展開をするには困難さがあった。そこで、今後の授業展望としては、「災害に対応できる介護福祉士の養成」に関する科目を独自に立ち上げるか、特別講演会を企画して興味関心を高めるとともに主となる科目に求心力を持たせつつ、そのほかの科目においても可能な限りにおいて災害時に関する観点にも言及していく方法が有効である。しかし、現状では新たな科目を立ち上げる授業時間表上の余裕は厳しく、また、選択科目としたのでは主要な部分を学ばずに終える学生も生じる。そこで今回模索したような教科ごとの可能な範囲における取り上げ方が現実的である。

平成21年度に本学で取り組んだ災害時に関する授業で参考になったテキストとして、日本介護福祉士会の「災害時における介護福祉支援ボランティア・マニュアル」があげられる。このマニュアルは、中越沖地震において災害対策本部を現地に設置運営できなかった反省からまとめられたものである。災害時は生命に直接的にかかわるニーズが優先される実態があり、本来の個別性を重視した質の高い本人らしい生き方を追求するには、緊急状態を脱して平穏になるまで待たなければならない。災害緊急時にクローズアップされるのは現場で災害活動に従事する緊急医療チームであり、レスキューであり、また自衛隊であり、そして行政やライフラインの復旧にかかわる担当者であり、あるいは身近な人であり幅広いボランティアである。しかるに介護福祉士として介護福祉支援ボランティアとして参加しようとしても介護福祉士へのニーズは緊急時には代行されてまかなわれていたり、介護福祉士へのニーズの把握が困難でその場も設定できていなかったりした。それは介護福祉士という専門職の専門性がどのように求められ応えられるものであるかの現れでもあった。もっとも、災害緊急時であろうとも生活は継続している以上、介護福祉ニーズがないわけではない。もとより平常の生活への移行期間やその準備にかかわる中・長期的なニーズもある。そこで、このマニュアルにおいては、介護福祉士が災害時介護においてもその専門性を発揮してかかわれるように、生活7領域を手がかりとした簡易なアセスメントシートを開発している。介護福祉士は介護サービスに関する有権者はもとより他の職種や、社会の一人ひとりから災害介護分野においても専門職として認知される必要がある。このマニュアルを手がかりとして介護福祉士養成教育を、「災害に対応できる介護福祉士の養成」という観点も各教科で共有して進めていくことによって、その根幹にかかわる介護福祉士の質の向上に生かしていくことができそうである。

参考文献

社団法人日本介護福祉士会　助成金事業報告 「災害時における介護福祉支援ボランティア・マニュアル」 平成20年度社会福祉推進費補助金（社会福祉推進事業）の国庫補助事業